Osaka University Knowledge Archive

Title	同期型遠隔授業に参加した中国人大学生に対する意識調査
Author(s)	松岡, 里奈; 立川, 真紀絵
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター　授業研究. 2021, 19, p. 27-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79304
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

同期型遠隔授業に参加した中国人大学生に対する意識調査

A Survey of Chinese University Students Participating in Synchronous Distance Learning

松岡　里奈・立川　真紀絵

【要旨】

本稿は、2020年春～夏学期に大阪大学日本語日本文化教育センター（以下、CJLC）の正規授業として行われた同期型遠隔授業を、中国から同時に受講した中国人大学生に対して行った意識調査に関する報告である。この目的は、世界でも先行してオンライン授業が行われていた中国の大学の学生に本遠隔授業がどのように受け止められたかを解明することであり、CJLCの遠隔授業配信事業の充実・発展につなげる知見を得ることが目標である。全15回の授業の内、９回を中国に配信し、本授業に参加した中国人大学生にアンケートとインタビュー調査を実施した。その結果、遠隔授業の技術的な側面については、音声と教員の画像はすべての回を通して安定的に良好な評価が得られたが、スライドの見せ方に関する課題が挙げられた。また教育的な側面については、本講義は学生が質問しやすく、教員とのやりとりも円滑であるという評価を受けた。やりとりの機会をさらに増やし適切に取り入れていく方法を模索することが次なる課題である。

１．研究の背景と目的

2020年春～夏学期に、大阪大学日本語日本文化教育センター（以下、CJLC）では、日本文化学・文学・宗教学・歴史学・民俗学専門の専任教員によるリレー講義「日本思想文化学研究基礎」が開講された。本講義は、CJLCの留学生を対象とした正規の選択科目であり、Zoom（web会議ツール）を使用した同期型の遠隔授業として行われた。また、本講義をCJLCの留学生に配信するのと同時に、日本語・日本文化研修教育共同利用拠点事業の一環として中国の３大学（同済大学・上海交通大学・大連理工大学）にも配信を行った。その遠隔配信システムは、教員が教壇に立って通常通り授業を行い、受講生はZoomを通して遠隔で参加するというものである。コロナ禍に見舞われた2020年春～夏学期においては、どの教育機関でも遠隔授業を余儀なくされ、加納（2020）が述べるように各教員が自宅でPCの前に座り、授業を配信していた授業が一般的だったと考えられるが、本稿における遠隔授業のシステムはそれとは異なり、通常の教室授業の受講環境をオンライン上で再現した形式として構築されたシステムである。

以上のようなCJLCの遠隔配信システムは、オンライン授業を世界でも先行して取り入れていた中国の大学の学生（藤田2020）にどのように受け止められていたのか。本稿の目的は、CJLCの遠隔授業配信システムを利用した本講義は、中国の大学が実施するオンライン授業とどう異なり、そして中国の大学の学生にいかに受け止められたのかを解明し、CJLCの遠隔授業配信事業の充実・発展へとつなげることである。そこで、中国人大学生に対する授業後のアンケート及びフォローアップインタビューを実施し、上記の目的に関する彼らの意識調査を行った。本稿では、その結果について論じる。

２．遠隔授業配信概要

２．１　日本語・日本文化研修教育共同利用拠点事業

CJLCは2011年4月1日に、学校教育法施行規則第143条の第２項に基づく教育関係共同利用拠点（「日本語・日本文化教育研修共同利用拠点」）として、文部科学大臣により認定されることとなった。それ以降、開設授業や学外研修、さらに海外教育事情に関して蓄積してきた情報を国内諸大学に広く開放し、日本語教育の充実を実現するとともに、日本語教員の養成に不可欠な教育実習や授業研究の機会を積極的に提供することで、日本語・日本文化教育の質的向上と発展に力を注いできた。

この拠点事業では、拠点申請大学の日本語学習者に対する日本文化系科目の授業配信[1)]に2015年から取り組み始め、本稿における中国３大学への配信は、これまでの成果をもとにしてセンターの正規授業に遠隔配信システムを本格運用したものである。なお、この中国への配信は、大阪大学グローバル・イニシアティブセンター（以下、GIセンター）と連携し、中国・同済大学に設置されている大阪大学東アジア拠点と協力体制をとり行われたものである。

２．２　本事業における遠隔授業が目指すところ

本事業における遠隔授業は、教員がPCの前に座り、Zoomなどの画面共有機能を使用するという、コロナ禍で一般的であった遠隔授業の形式（加納2020）とは異なり、2015年に遠隔授業のシステム構築を行ってきた初期の段階から、通常の教室授業の形態をオンライン上で再現することを目標としている。つまり、教員は教室の教壇に立ち、PPTやその他教材を教室前方スクリーンに映し出しながら授業をおこない、それを教室中央のカメラを通して、受講生に配信するという形式である。これにより、自宅パソコンから受講していても通常の教室授業に近い映像を見ることができる。また授業担当教員は、通常通りの教室授業を準備すればよいため、遠隔授業実施に伴う負担が軽減されると考えられる。この形態を再現するために使用した配信設備に関しては次節で詳しく述べる。

2．3　配信設備

本授業はCJLC内にある遠隔配信用教室で行われた。使用した機材とその配置図は図１のとおりである。この遠隔配信用教室は、マジックミラー越しに参観室が設けられており、教室内を観察しながら教室内のカメラやマイクの操作も可能となっている。

この授業の配信には、授業担当教員以外に３名の補助がついた。まず、拠点担当教員（筆頭著者）がZoom入室管理、チャット管理、オンライングループ活動（ブレイクアウトルーム機能）管理を含む授業全体の管理を担い、授業担当教員の全面的な補助を行った。次に、中国への配信に関わる通

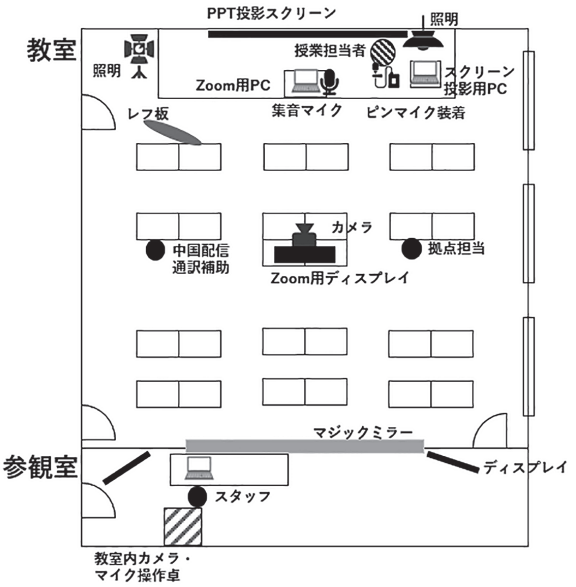


図１：2020年春～夏学期　遠隔配信用教室システム

訳・連携補助として大阪大学GIセンターの中国出身教員が毎時間サポートに入った。そして隣接する参観室にはCJLCの遠隔事業補助スタッフが常駐し、PPTに映し出されている写真などをアップで映し出す必要が出た場合などに、カメラの操作を担った。

実際の授業の様子を写真１に示す。教室内には２台の照明が設置され、一台は教員の頭上に設置、もう一台はレフ版を使用し反射させて使用した。これは、スクリーンに投影されるPPTをできるだけきれいに映し出すために、教室内の電気はできるだけつけないようにし、教壇横の窓のブラインドも閉めているため、暗くなりがちな教員の顔を明るく浮かび上がらせるためである。また、音声に関しては、授業担当教員の希望によって、教壇上の集音マイク、または装着型のピンマイクのどちらかを使用できるようにした。

写真１：遠隔配信用教室での授業の様子

授業担当教員は、通常授業と同様に教壇に立って授業をおこない、受講生の様子は、目の前の大きいディスプレイで確認ができる。このディスプレイは、教卓PCと接続されPC上のZoom画面がそのまま映し出されているため、教員は手元のPCを覗き込む必要がない。そしてディスプレイの上部には教員の様子を撮影するビデオカメラが設置されており、教員がディスプレイ上の学生を見ているだけで、自然にカメラ目線となるようになっている。これは、画面越しに受講している学生に、常に教員に見られているという感覚を持たせ、集中力を高める効果を期待して設計されたものである。次節よりこれらの設備を使用して配信された授業について詳しく述べていく。

２．４　授業の概要

2020年春～夏学期のシラバスより、本授業「日本思想文化学研究基礎」の授業の目的と概要、学習目標を以下に提示する。

〇授業の目的と概要：
この授業は、日本文化に対する理解を深めるために、様々なテーマを通して日本文化の知識や日本人の思想を幅広く学ぶ授業です。歴史学、文学、仏教学、民俗学、比較文化学などの観点から、多様な日本文化についての幅広い知識を身につけ、日本文化に対する理解を深めることができます。講義は、各分野の教員７名が、１回につき１つの日本文化のテーマを取り上げて順番に教えるリレー講義形式で行われます。
〇学習目標：
様々な観点からの日本文化について学ぶことで、日本文化の幅広い知識と日本文化に対する理解を深めることができます。

以上の方針のもと行われた授業に、本センターの正規留学生15名（国籍は８カ国）が登録されたが、感染症拡大防止のため全学生が学内寮やアパートの自室からの遠隔での受講となった。

そして、全15回の授業の内、第７回から第15回までの全９回を、中国の計３大学へ同時配信を行った。配信された授業は表１の通りである。

表１：中国に配信した授業一覧

	授業回	日にち	講義タイトル	分野
1	第７回	2020年６月９日	日本のスーパーヒーローはなぜ「変身」するのか ―宗教文化の視点から考える―	宗教文化
2	第８回	2020年６月16日	なぜ近代のはじめに日本の女性が書いた小説は、テーマが似ていたか	近代文学
3	第９回	2020年６月23日	なぜ日本人は写真で笑うようになったのか	大衆文化
4	第10回	2020年６月30日	日本にはなぜ鬼や河童などの妖怪が多いのか	民俗学
5	第11回	2020年７月７日	なぜ泉鏡花の登場人物はふしぎな行動をするのか	近代文学
6	第12回	2020年７月14日	手塚治虫はなぜ「マンガの神様」と呼ばれるのか ―手塚治虫と戦後日本のマンガ・アニメの発展―	近現代史
7	第13回	2020年７月21日	なぜ源氏物語は日本文学を代表する作品といわれるのか	古典文学
8	第14回	2020年７月28日	日本にはなぜ髪をそらないお坊さんがいるのか ―日本仏教における「行」の意味を考える―	仏教文化
9	第15回	2020年８月４日	なぜ「すばらしい」と言われる樋口一葉の小説は、彼女の先生にほめられなかったか	近代文学

中国に配信された全9回の授業は、表1のとおり専門分野の異なる教員7名[2)]によって行われた。また、講義タイトルをすべて疑問文の形で提示しているのは、教育的効果を狙ったもので、受講生の受講意識を高めるためである。

2.5　受講生の情報

本節では本講義を本センターの正規留学生以外に受信した中国の3大学の学生について述べる。中国への配信は、大阪大学の東アジア拠点が設置されている同済大学から始まり、その後、大阪大学と交流協定が結ばれている上海交通大学、大連理工大学へと広がっていった。同済大学と大連理工大学は主に日本語学科の学部生もしくは大学院生が参加し、上海交通大学は日本語をサークル活動で学んでいる理系の学部生もしくは大学院生が参加した。この3大学の各回の受講人数は表2で示した通りである。

表2：各回の受講人数

	授業回	同済大学 （日本語学科）	上海交通大学 （理系学生）	大連理工大学 （日本語学科）	合計
1	第7回	23	－	－	23
2	第8回	17	5	－	22
3	第9回	7	6	－	13
4	第10回	10	9	5	24
5	第11回	12	3	3	18
6	第12回	15	11	14	40
7	第13回	15	9	5	29
8	第14回	18	5	1	24
9	第15回	11	2	3	16

表2において第9回や第11回、第15回の受講者が少ないのは、中国の試験期間や夏期休暇と重なったためである。受信学生にとっては本授業を受けても所属大学の成績などには一切関係がないため、所属大学の事情を優先するのは当然であろう。とはいえ、受講人数が0名になることはなく、本センターの正規授業の遠隔配信には一定のニーズがあったと言える。

3．調査概要

本研究では、CJLCの遠隔授業配信システムを利用した講義は、中国の大学が実施するオンライン授業とどう異なり、中国の大学の学生にいかに受け止められたのかを解明するために、毎授業後にアンケート調査を行った。また、中国の大学におけるオンライン授業について調査する目的で、学期終了後に一部の学生を対象にインタビューを行った。本章では、これらの調査の概要について述べる。

3．1　授業後アンケート調査

毎授業の受講後に、中国の受信学生に対してアンケート調査を行った。まずCJLCの拠点事業担当者が日本語で作成したアンケートを、大阪大学東アジア拠点担当者に送り、中国語に翻訳の上、学生にオンライン掲示板上で配布してもらった。アンケートの回収率は表３の通りである。アンケートに使用した媒体が第７回～第11回まではWordファイル式のアンケートフォームだったため回収率が100％に満たなかったが、第12回～第15回では中国のオンラインアンケートフォームに変更し回収率が100％となった。

アンケートは選択式・記述式を含む全17問構成で、問１・２で大学名と学年について回答したあとにアンケート本編に入った。表４に、アンケート内容を提示する。

表３：アンケート回収率

	授業回	中国受講人数合計	アンケート回答人数
1	第７回	23	20（86.95%）
2	第８回	22	20（90.90%）
3	第９回	13	12（92.30%）
4	第10回	24	24（100%）
5	第11回	18	18（100%）
6	第12回	40	40（100%）
7	第13回	29	29（100%）
8	第14回	24	24（100%）
9	第15回	16	16（100%）

表４：アンケート内容

問	回答方法	アンケート内容＜日本語版＞
1	選択式	大学名
2	選択式	学年
3	選択式	先生の顔はよく見えましたか。
4	記述式	みなさんのデバイスで見ていた映像について何かコメントがあれば書いてください。
5	選択式	先生の声はよく聞こえましたか。
6	記述式	聞いていた音声について何かコメントがあれば書いてください。
7	選択式	授業中に質問が言いやすかったですか。
8	選択式	先生とのやりとりはスムーズでしたか。
9	はい・いいえ	今回の授業で先生は教室のスクリーンにPPTをうつしていましたか。
10	選択式	先生の後ろのスクリーンに映してあるPPTのスライドの文字がよく見えましたか。
11	選択式	スライドの絵や写真はよく見えましたか。
12	はい・いいえ	先生による板書がありましたか。
13	選択式	先生の板書はよく見えましたか。
14	記述式	今回のような「いつもの教室の授業をオンラインで受ける遠隔授業」は、どうでしたか。「教室の授業」や「ほかの遠隔授業」と比べて書いてください。
15	選択式	また参加したいですか。
16	記述式	どうしてそう思いますか。
17	記述式	最後に何か意見があれば書いてください。

回答方法で「選択式」とあるものの内、問１・２以外は、「強くそう思う・そう思う・どちらでもない・あまりそう思わない・そう思わない」の選択回答式である。アンケート終了後、東アジア拠点担当者から中国語の原本回答と結果集約表を送付してもらった。

３．２　インタビュー調査

遠隔配信授業に参加した中国人大学生を対象として、2020年８～９月にインタビュー調査を実施した。３大学の教員から調査に協力可能な学生を５名ずつ紹介してもらい、連絡がついた12名の学生にインタビューを行った。協力者の内訳は表５の通りである。

表５：インタビュー調査協力者の情報

	学年	専門		学年	専門		専門	学年
同済（５名）	１年	日本語	上海交通（３名）	修士１年	工学熱物理学	大連理工（４名）	日本語	１年
	２年（３名）	日本語		修士１年	電気工学		日本語	２年（３名）
	修士１年	言語学（日本語）		修士３年	予防医学			

インタビューは一名につき10分前後で、協力者に使用言語を選んでもらい（日本語または中国語）、筆者らがZoomにより実施した。調査内容は、中国の大学で受講したオンライン授業とCJLCにおける遠隔配信授業の比較などで、主にそれぞれの授業形態やそれに対する感想について質問した。なお調査時には、調査目的、および研究以外にはデータを一切使用しないことを協力者に説明した上で、許可を得て音声を録音した。

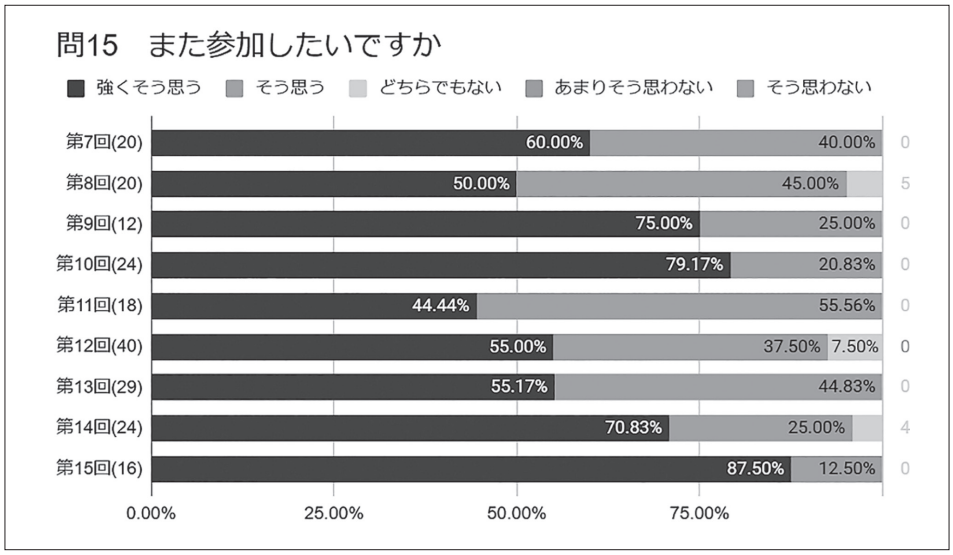
４．分析と考察

本章では、遠隔授業の技術的な側面と、教育的な側面に分けて論じる。なお、収集したデータのうち中国語で回答されたものは、中国語を理解する共著者が日本語に翻訳し、中国人日本語教員によるチェックを受けた上で、本稿の本文には日本語で記載した。

４．１　システム・機材、配信方法についての意識

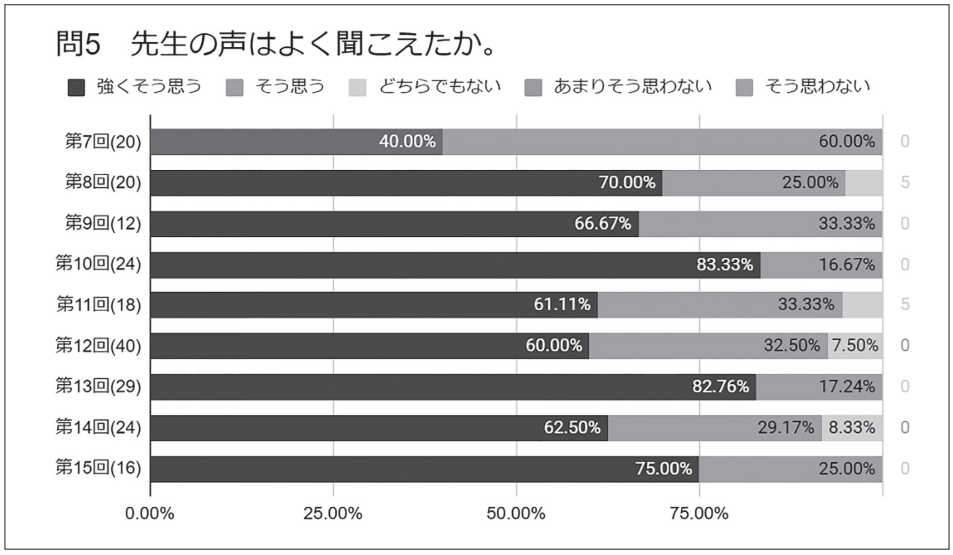
本節では、遠隔配信授業の配信システムや機材の面に焦点を当て、主に3. 1で示したアンケート調査の結果から、中国の学生にどのように受け止められていたのか述べる。

まず、アンケート問15「また参加したいですか」への回答結果はグラフ１の通りである。第７回～第15回まで「強くそう思う」と「そう思う」を選択した回答率の平均は98.15％で、100％に近い学生が参加意欲を示したことから、受講の満足度が非常に高く、全体として好評だったことが窺える。特に講義内容や教員の説明に対する評価が高く、問14で本講義の遠隔配信に関する評価を求めた際には、「先生の説明がとても熱心で面白い（第14回）」、「すごいと思う。先生が学生の反応に気を配ってくれるし、テーマも面白い（第10回）」などのように肯定的な意見が寄せられた。これらの結果から、中国の学生には、この遠隔配信授業は好意的に受け止められていると言える。



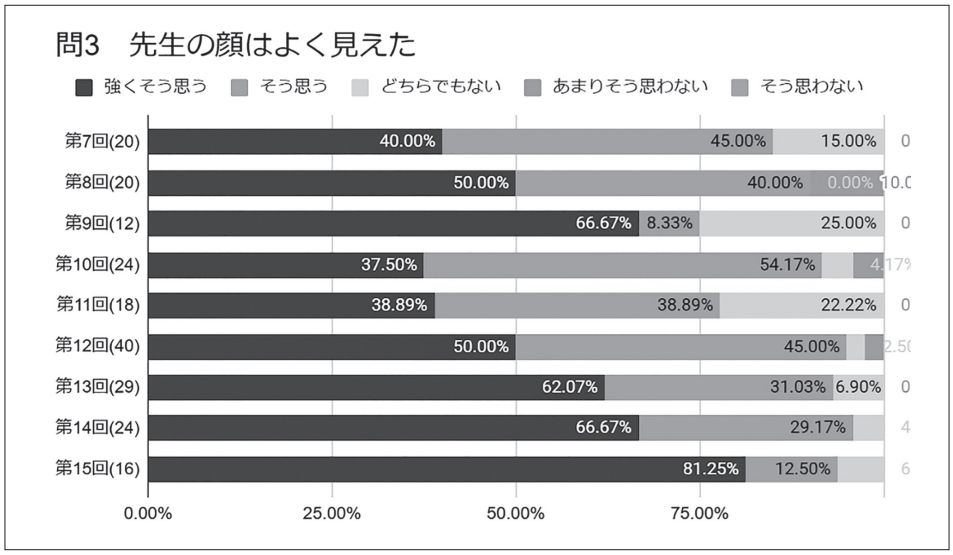
グラフ１：問15の結果

次に、配信側のカメラとマイクに関する評価を求めた問３「先生の顔はよく見えたか」と問５「先生の声はよく聞こえたか」の回答結果をグラフ２、グラフ３に示す。



グラフ２：問５の結果

まず、グラフ２を見られたい。問５「先生の声はよく聞こえたか」ではどの回も91％以上の学生が「強くそう思う」もしくは「そう思う」を選択し、マイクの設備に関して高評価を示した。また、グラフ３に示した問３「先生の顔はよく見えたか」に関しては、第９回と第11回をのぞいた、他７回では85％以上の学生が「強くそう思う」と「そう思う」のどちらかを選択し、教員の顔の見え方に関しては高評価であった。しかし第９回は75％、第11回は77.78％と、他に比べ少し評価が下がったが、これは配信側として特に配信環境に変更を加えたわけではないため、受信側のインターネット環境に影響を受けたものであると推察される。例えば、第15回のアンケート結果によると、一つの回であっても「長時間画面が黒くて、授業をよく聞けません（問

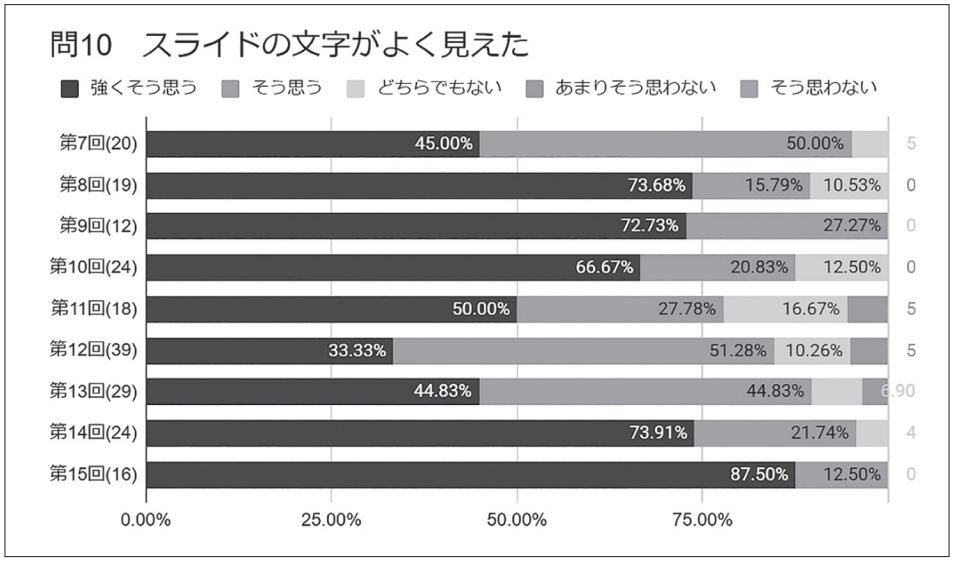


グラフ３：問３の結果

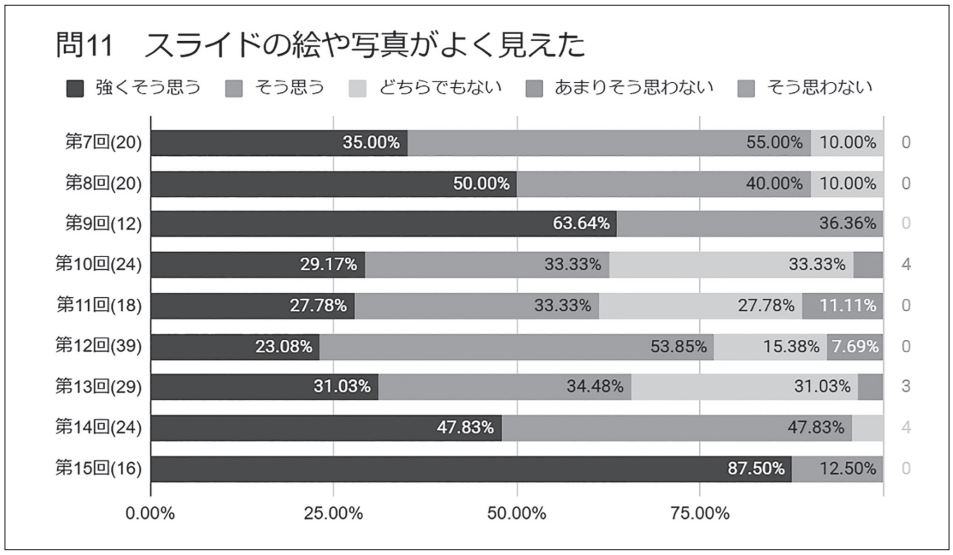
４)」という否定的な意見と「音も映像も非常にはっきりしています（問14)」という肯定的な意見が同時に見られた。つまり、映像と音声の質は、受信側の個人の通信環境に大きく左右されていることがわかる。したがって、学生の通信環境が良好であるという状況下においては、今回の授業配信の試みが成功したのではないかと考えられる。

しかし、調査の結果、PPTを投影するスクリーンの見え方には問題があったということがわかった。グラフ４、グラフ５を見られたい。グラフ４は問10「スライドの文字がよく見えた」、グラフ５は問11「スライドの絵や写真がよく見えた」の選択式回答の結果である。

グラフ４とグラフ５より、第10回～第13回の結果が他と比べて落ち込んでいることが分かる。特にグラフ５の問11の結果で見るとそれが顕著に表れ、「強くそう思う」と「そう思う」を足しても、第10回62.50％、第11回61.11％、第12回76.92％、第13回65.52％であった。つまり、PPTを投影していたスクリーン上に絵や写真が投影された場合には、よく見えていない場合があっ



グラフ４：問10の結果



グラフ５：問11の結果

たということが言えるが、それはなぜだろうか。第13回を例に挙げて考えると、第13回は絵巻を画像として取り込んだものが使用された古典文学の回である。古典に関する題材のため、まず絵巻そのものの色彩がはっきりしたものであるはずがなく、本などに載った絵巻を画像にしてPPTに取り込む行程を踏むと、細部まではっきりと確認できなくなるのは当然のことであろう。また、近代文学や近現代史の講義において、学生の興味の喚起や理解の促進を狙い、漫画画像が使用されることもあった。教員としては漫画の吹き出しの台詞まで読み取らせる意図ではなかったとしても、学生側としては漫画を見せられたら台詞まで読み取ろうとしてしまう。しかし、吹き出し内の文字はさらに小さい文字になるため読み取ることはできない。これが学生の不満につながったと考えられる。インタビューにおいても「中国は画面共有だからきちんと見える（大連)」「画面共有で見たい。教室の形式は少し見にくいからやめた方がいい（大連)」という意見のように、画面共有の方が望ましいと考える学生が複数名いた。

これらのように受信側が読み取る限界がある画像については、観察室にいるスタッフがカメラ操作を行いアップにして見せるようにしていた。アンケートの問14で本稿における遠隔配信システムを使った授業についての評価を求めると、絵巻などの見えにくさが指摘されていた第13回であっても「大切なところに焦点を当てて、撮影内容を変えていたので、はっきり見えました」という肯定的な意見もあったことから、そのような操作には一定の有効性があったと考えられるが、結果としては限界があり、他の回に劣る評価となった。

インタビュー調査の結果からも、講義内容の理解を助けるために、イラストや写真などの視覚情報を入れてほしいという意見があったことから、視覚情報を有効に活用していくことは重要な課題であると考えられる。そのため、改善策としては次のように考えられる。PPT上の発表者ツールで選択できる画面の拡大機能を使用し、教員自身が教壇で見せたい部分を一段階拡大させる、またはワイヤレスプレゼンターを使用し指定の位置をより拡大させ大きく映し出すようにする。その上で、参観室の制御盤から、カメラを操作しアップにすることにより改善できると考えられる。ただし、第９回大衆文化、第14回仏教文化、第15回近代文学の講義は、第10～13回と同様に絵や写真が多用されていたにもかかわらず、グラフ５によると特にこの３回

は100%、95.65%、100%と評価が高く、これらの講義で使用された絵や写真はよく見えていたことがわかる。この結果は教員の音声と顔の見え方についての質問であるグラフ２、グラフ３と比較したところ、それらと連動しているものではないため、インターネットの通信状況による変化ではないと言える。したがって、教員個人がPPTを作成する段階の努力次第では見え方が改善できる可能性があると考えられるため、今後の授業改善に活かしていきたいと考えている。

４．２　授業形態についての意識

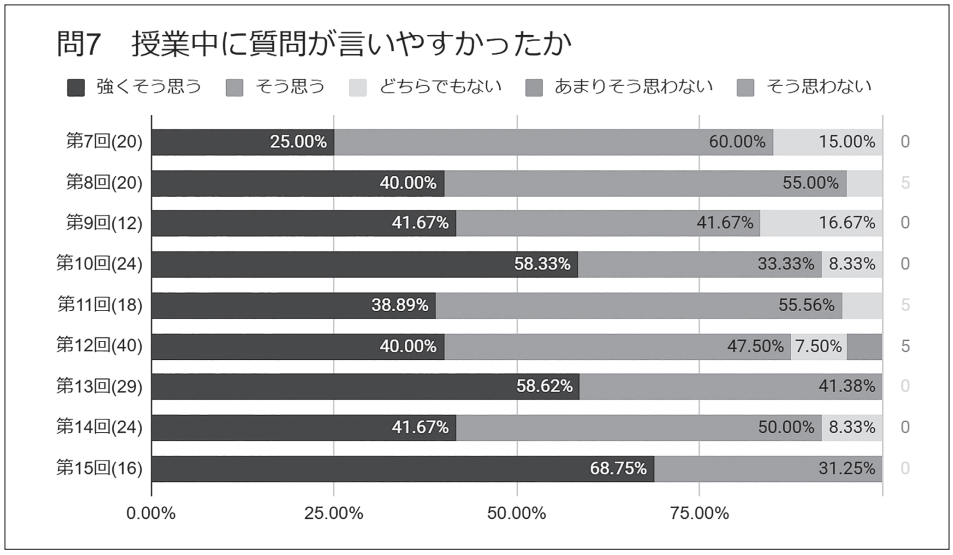
本節では、①CJLCの授業形態の受け止められ方、および②学生が望ましいと考える授業形態について論じる。

まず、①CJLCの授業形態の受け止められ方について分析する。2.2で前述したとおり、CJLCの遠隔事業では、教室の授業をそのままオンラインで配信することが目標である。そのため、動画を一方向的に配信するのではなく、教室で行われるような学生の自然な授業参加をオンラインで実現することを目指してきた。そこでアンケートにおいて、問７「授業中に質問が言いやすかったか」、および問８「先生とのやりとりはスムーズだったか」という教室における学生の発言に関する質問をした。それらの結果を以下のとおり、グラフ６、グラフ７に示す。

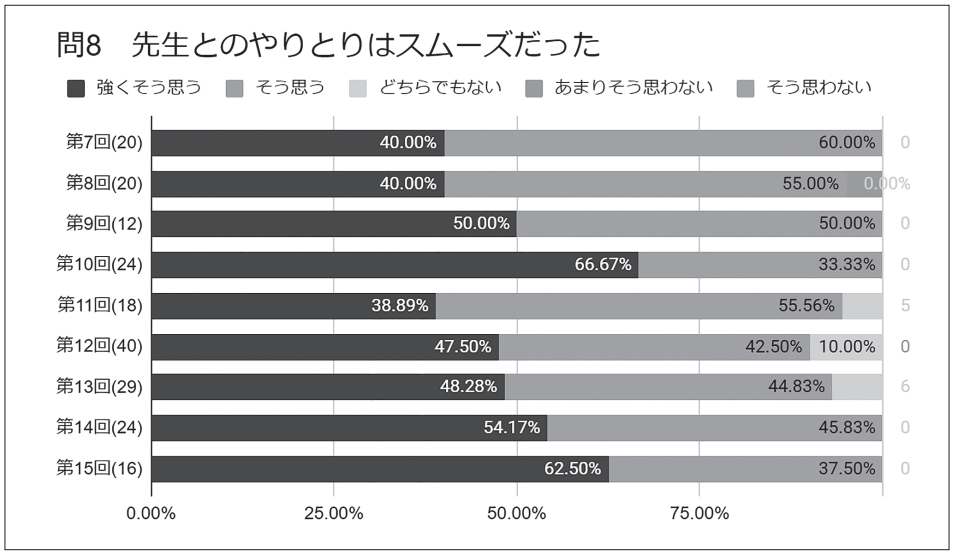
グラフ６、グラフ７の結果は、いずれも８割以上の学生が「強くそう思う」または「そう思う」を選択しており、全体的に肯定的な評価が得られたと言える。ここから、今回の配信授業が総じて、多くの学生にとって発言がしやすい状況であったことがわかる。特に、上記の結果において着目したい点は、問７と問８の両方において、「強くそう思う」の割合が最も多かった第10回と第15回である。これらの回は、質問時間を複数回設けて学生に問いかけたり、グループ活動を取り入れたりした回であった。受信側のインターネット環境に大きな問題がなく、音声、画像ともにスムーズに伝達されることが前提ではあるものの、それに加えて、授業形態の効果により、学生が発言をする姿勢を引き出すことができたのではないかと考えられる。

続いて、②学生が望ましいと考える授業形態についてインタビューの結果をもとに論じる。

インタビューにおいて「大学がオンライン授業を開く際に重要なこと」について尋ねたとこ



グラフ６：問７の結果



グラフ７：問８の結果

ろ、オンライン授業では、学生がより集中して授業に取り組むことや、配信側がそれを促すことが必要であるという意見が散見された。例えば、「学生が自覚を持って自力で勉強するのが大変。自分が勉強する意識が大切（大連）」、「（教師にとって）重要なのは、教える情報をきちんと学生に届けること、学生はしっかりと受け取ること。オンライン授業だと、まじめに対応しないことがあって、それだと学生は同じ時間を使っても＊＊＊（聞き取り不能）オフライン授業のように深い理解に達することはできない（上海）」というものである。

そのように学生の注意を引き付け、授業参加を促すための一つの方法として、授業における学生同士や学生と教員とのやりとりを活発化するということが考えられる。学生からも上記の同じ質問に対して、「先生と学生のやりとりが多かったらいい（同済）」、「先生と学生の間の交流があること（同済）」という意見が挙がった。CJLCの授業についての感想として「ビデオを見ている感じがした（同済）」と述べた学生が、上記の質問に対して「先生から質問を投げてほしい。やりとりをできるようにしてほしい」と回答しているように、授業内での他者とのやりとりを促すことは、学生が授業に集中して参加することにつながるのではないかと考えられる。

上記の授業内での他者とのやりとりについては、CJLCのオンライン授業のよい点と、改善点の両方の回答として、複数の学生から挙げられた。よい点としての意見には「大阪大学の授業は、多くの学生が自分の様々な見方を発表する。それはいいと思う（大連）」というものがあった。反対に、改善点としては「改善するなら、グループディスカッションを入れてくれたらもっといい。学生の交流があればもっといい（同済）」などが挙げられた。

前述したとおり、質問やディスカッションの時間をどの程度設けるかは、授業によっても差があるため、インタビューにおいても様々な意見が挙がったものと考えられるが、学生はそのように授業内で発言する機会を与えられるという講義の進め方に対して、非常に肯定的にとらえており、その必要性を感じていることがわかった。今回のインタビューからは、学生が発言する時間を一定程度設定し、学生同士、あるいは学生と教員とのやりとりを取り入れていく授業形態を模索していくことが望ましいのではないかと考えられる。

5．まとめと今後の展望

本稿では、CJLCの遠隔授業に参加した中国人大学生にアンケートとインタビュー調査を実施した。その結果、遠隔授業の技術的な側面、すなわちシステム、機材・配信方法については、音声と教員の画像はすべての回を通して安定的に良好な評価が得られた。個別に通信状況の不調を訴える学生がいたものの、それは個人のインターネット環境によるものであると考えられる。一方、スライドの見え方については評価が高いとは言い難く、改善の余地があることがわかった。スクリーンの前に教員が同時に映り込む方法は、画面共有に比べてスライドが不鮮明になるという意見が散見された。CJLCでは教室授業をそのままオンラインで配信するべく試行を重ねているため、現在の形式でスライドがより見やすくなるように、今後、スライドの段階的な拡大や色彩の変更を取り入れることにより、改善していく必要がある。

続いて、教育的な側面、すなわち授業形態については、CJLCの講義は学生が質問しやすく、教員とのやりとりも円滑であるという評価を受けた。特に、質問する機会を複数回設けたり、グループ活動を取り入れたりした講義に対する評価が高かった。教室で行われるような学生の自然な授業参加を実現するためにはそれらの取り組みは非常に重要であると言える。また学生は、オンライン授業では学生自身が授業に参加していく姿勢が必要であると考えていることがわかった。それを促すためにも、学生の発言する機会を設け、学生同士、あるいは学生と教員のやりとりを取り入れることは有効ではないかと考えられる。その点について、今後適切な取り入れ方を模索し、学生の授業参加を促していきたいと考える。

本稿における調査は、全15回のうちの９回の授業に対する意識調査であり、さらに、調査協力者もすべての授業に参加したわけではないため、今回得られたデータは限られたものであると言える。その一方で、オンライン授業を経験してきた中国人大学生が、それらの授業と比較してCJLCの授業をいかに受け止めるかについて、実際にCJLCの授業に参加してもらった上で、調査したことは有意義であると考える。本稿で明らかになった知見をもとに授業改善を行い、今後の遠隔配信事業のさらなる発展につなげたい。

注

１）これまでの遠隔配信に関する報告は、藤平（2018）、Fujihira（2019）を参照されたい。

２）第７回と第14回、第８回と第15回は同じ教員によって行われたため、７名の教員で９回分の授業を担当したことになる。

参考文献

加納寛子（2020）「コロナ禍における高等教育のオンライン授業の可能性について」『日本科学教育学会第44回年会論文集』、日本科学教育学会、pp.521-524.

藤田哲雄（2020）「中国のオンライン教育の展開と今後の展望」『アジア・マンスリー』株式会社日本総合研究所，７月号（No.232），pp.1-2.

https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/report/asia/pdf/11902.pdf（最終閲覧日：2020.12.26）

藤平愛美（2018）「日本文化科目の遠隔配信における授業形態と接続方法の連関性」『グローバル化時代における日本語教育と日本研究』ハノイ大学、pp.272-279.

Fujihira, M（2019）“Distance Learning of Japanese Culture: How to Create a Blended Classroom.”

INTERNATIONAL SEMINAR ON JAPNESE STUDIES IN SAARC COUNTRIES, Japanese Studies in India and South Asia: Towards a New Horizon. Jawaharlal Nehru University, New Delhi, India. December 9-10, 2019.

（まつおか　りな　本センター特任助教）
（たちかわ　まきえ　本センター講師）